

魯迅の素顔を識る入門書!!

今、魯迅を読み返すことの意義!!

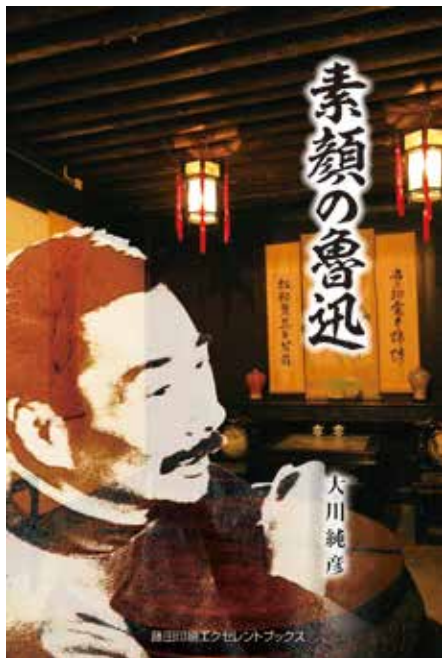
魯迅「藤野先生」から(竹内好訳1976年)――

「私の講義、ノートが取れますか?」とかれは訊ねた。「どうにか」「見せてごらん」私は筆記したノートをさし出した。かれは受け取って、一兩日して返してくれた。そして、今後は毎週持ってきて見せるようにと言った。持ち帰って開いてみて、私はびっくりした。同時にある種の困惑と感激に襲われた。私のノートは、はじめから終わりまで、全部朱筆で添削してあり、たくさんの抜けたところを書き加えただけでなく、文法の誤りまでことごとく訂正してあった。このことがかれの担任の骨学、血管学、神経学の授業全部にわたってつづけられた。――中略――だが、なぜか私は、今でもよくかれのことを思い出す。わが師と仰ぐ人のなかで、かれはもっとも私を感激させ、もっとも私を励ましてくれたひとりだ。私はよく考える。かれが私に熱烈な期待をかけ、辛抱よく教えてくれたこと、それは小さくいえば中国のためである。中国に新しい医学の生れることを期待したのだ。大きくいえば学術のためである。新しい医学が中国に伝わることを期待したのだ。私の眼から見て、また私の心において、かれは偉大な人格である。その姓名を知る人がよし少いにせよ。

『呐喊』(1923年)の「自序」――

あのことがあって以来、私は、医学などは肝要でない、と考えるようになった。愚弱な国民は、たとえ体格がよく、どんなに頑強であっても、せいぜいくだらぬ見せしめの材料と、その見物人となるだけだ。病氣したり死んだりする人間がたとい多かろうと、そんなことは不幸とまではいえぬのだ。むしろわれわれの最初に果たすべき任務は、かれらの精神を改造することだ。そして、精神の改造に役立つものといえば、当時の私の考えでは、むしろ文芸が第一だった。そこで文芸運動をおこす気になった。(竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記』(1955年)岩波文庫)

魯迅は何故『阿Q正伝』、『狂人日記』を書いたのか!!



〈あとがきより〉
「魯迅」とは、私にとって、戦後そのまま生きてきた私たち同世代の者にとって、あるいはおおげさにひろげて日本人にとって、何なのだろうか? こんな問いを立てられる人物はそれほど多くはないだろう。だが戦後の日本とアジアのありようを思う時、その問いを発するに値する存在に魯迅を擬するのは、私の突飛な暴論だろうか。少なくとも私の前半生の「昭和」の時代まではある種の妥当性をもっていったような気はするのだが。そう思って、日本での魯迅像について私なりのイメージをたどってみる。
日本での魯迅は好むと好まざるを越えて、竹内好の「魯迅」にまず規定されてしまう。その圧倒的な影響力の下に、さらに私のような素人ファンには追いつけないほどの無数の魯迅論が現れた。
今思えばふしぎなほど、七十年代までの間、「竹内魯迅」を継いでさまざま「魯迅」が学界、論壇の一隅に盤踞した。中央ばかりではない、地方にも各種の「魯迅」がいたように思う。

貴店番線	発行: 藤田印刷エクセレントブックス TEL0154-22-4165 FAX0154-22-2546	
月日	素顔の魯迅	
冊	大川純彦 著 定価1,100円(税込) ISBN 978-4-86538-144-3 C0222 ¥1000E	2022年10月22日 第1刷発行 発行所 藤田印刷エクセレントブックス 判型 新書判(192頁) 印刷・製本 藤田印刷株式会社

ご注文はJRCへ FAX03-3294-2177まで